
【第2回】 京都の天龍寺を開山した夢窓疎石のお墓が岡山県津山市

加茂町に？ - その2 -

石造宝篋印塔(せきぞうほうきょういんとう)は、中・近世において墓や信仰に関する塔として全国各地でつくられた石塔で、下から、基礎、塔身、笠、相輪(そうりん)と呼ばれる大きく四つの部位で構成されています。

岡山県津山市加茂町塔中(たちゅう)にある夢窓疎石(むそう そせき)ゆかりの石造無縫塔(せきぞうむほうとう)の右隣にある、松溪庵(しょうけいあん)を開山した宝山大和尚のものと伝わる石造宝篋印塔は、花崗岩製で高さが1メートル31センチあります。



**石造宝篋印塔（右）と石造無縫塔（左）
（岡山県指定重要文化財）**

この石造宝篋印塔は、厚みのある板石2枚を並べて基壇とし、その上にのせた四角形の基礎は正面と左右の側面を四角いフチの輪郭で囲んだ中に格狭間(こうざま)を刻み、上部を2段に加工しています。そして基礎の上に四角柱の形状をした塔身を、さらにその上に四隅に隅飾(すみかざり)と呼ばれる突起状の飾りを施した下2段上6段の笠をのせ、最上部には頂上に宝珠(ほうじゅ)、その下に請花(うけばな)、九輪

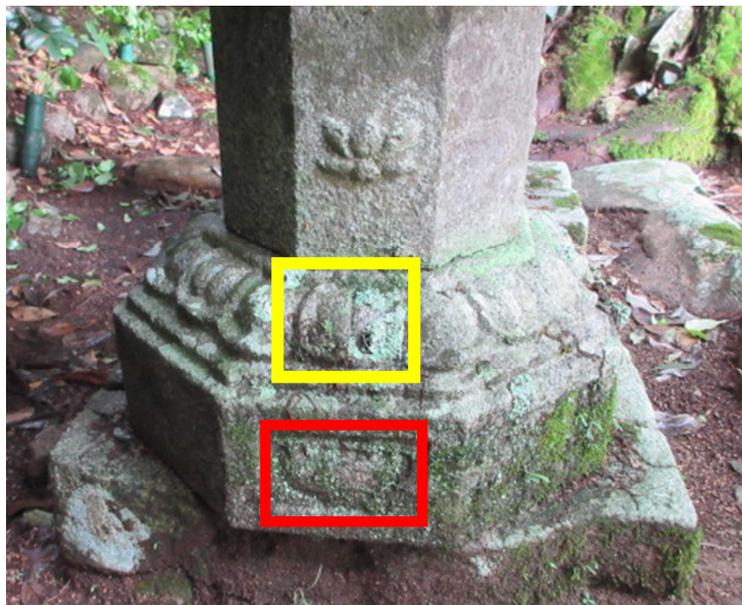
(宝輪)、請花、鉢を伏せた形の伏鉢(ふせばち・ふくばち)の順に石を刻んだ棒状の相輪(そうりん)が据えられています。

この宝篋印塔は、最上部の宝珠の上側が張って下側の裾を少し絞った形状であること、相輪の九輪塔が上に向かって少しずつ細くなっていること、笠の四隅にある隅飾の内側の弧を描く線(弧線)が二つ(2弧)で輪郭を巻いているとともに外側がほぼ垂直に立ち上がっていること、塔身の側面が高さ22センチ・幅22.5センチとほぼ正方形であること、基礎の格狭間の文様である花頭曲線(かとうきょくせん)の上部に少し波状の模様が見られ、下部は左右に張り出しており、格狭間の内部は盛り上がった丁寧な仕上げが施されていること等、塔の形状や様式から南北朝時代につくられたと考えられます。



石造宝篋印塔の棒状の相輪と隅飾のある笠(下側)

また、左隣の夢窓疎石ゆかりの石造無縫塔についても、八角形の基礎の上部に刻まれた反花(かえりばな)の側面が膨らみを持ったカーブを描き、蓮弁(蓮の花びら)の中央を線で二つに分けて複弁とし、その両側を立体的に隆起させていることや、前述の



石造無縫塔の反花の複弁(黄枠内)と格狭間(赤枠内)上部の波状の花頭曲線

石造宝篋印塔と同様に、基礎の側面の格狭間の花頭曲線の上部分が、わずかに波状の模様になっているとともに、下部が左右に張っており、格狭間の内部も少し盛り上がった丁寧な仕上げが施されている等の特徴から、同じく南北朝時代の作とされています。

文殊堂の後ろにあるこの石造宝篋印塔と石造無縫塔は、いずれも欠失が無く完形を留めており、当時の技法を今に伝える貴重なものとして岡山県の重要文化財に指定されています。

それでは、なぜ岡山県津山市加茂町に、京都の天龍寺を開山した高僧「夢窓疎石」ゆかりの石塔があるのでしょうか？（つづく）